

【1】(肝・胆・脾)

70歳男性。20年前より肝細胞癌に対する計4回の手術と血管内治療を繰り返し施行されていた。外来で経過観察されていたが、PIVKA-IIの値が上昇してきたため精査・治療目的に入院となった。

意識は清明。身長161.1cm、体重57.3kg。体温36.4℃。脈拍69/分、整。血圧97/55mmHg。眼瞼結膜に貧血はなく、眼球結膜に黄染を認めない。腹部は平坦、軟。

血液所見：赤血球511万、Hb15.3g/dL、Ht44.0%、白血球5140、血小板11.0万、プロトロンビン時間99% (基準80~120)。血清生化学所見：総蛋白8.5g/dL、アルブミン3.7g/dL、総コレステロール138mg/dL、総ビリルビン0.8mg/dL、AST32単位、ALT20単位、LD246単位 (基準176~353)、ALP193単位 (基準260以下)、 γ -GTP50単位 (基準8~50)。免疫学所見：HBs抗原陽性、HCV抗体陰性、抗核抗体陰性、抗ミトコンドリア抗体陰性、 α -フェトプロテイン4ng/mL (基準20以下)。PIVKA-II 2266.6ng/mL (基準1ng/mL未満)。Child-Pugh分類はA。

(1)次のうちChild-Pugh分類の項目に含まれないものを1つ選べ。

- a. 腹水
- b. 血清アルブミン値
- c. 血小板数
- d. プロトロンビン活性値
- e. 血清ビリルビン値
- f. 脳症

入院後のCTにて右葉に多発する腫瘍性病変を認め、外科的手術も検討されたが内科的治療を優先する方針となった。内科的治療後の症状は安定していたため退院となったが、退院3週間後、以下に示す写真のような症状が出現し、歩くことや、物を持つといったことが困難となった。



(2)治療に使われた薬剤はどれか、以下の選択肢から1つ選べ。

- a. ソラフェニブ (分子標的薬)
- b. シスプラチン (白金製剤)
- c. ペグインターフェロン α -2a (インターフェロン製剤)
- d. インフリキシマブ (抗TNF- α 製剤)
- e. ニボルマブ (免疫チェックポイント阻害薬)

【2】(消化管)

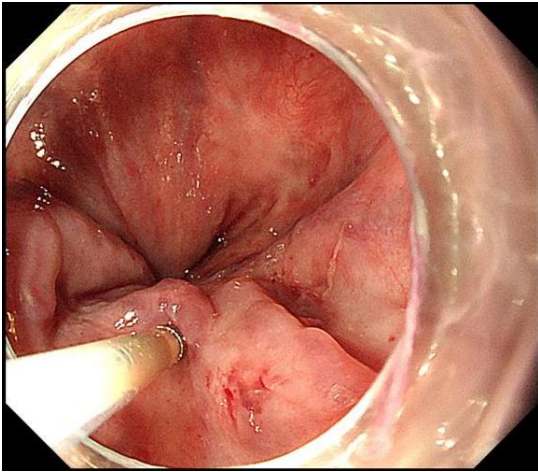
70歳男性。これまで何度も上部消化管出血を繰り返しているため、紹介となった。

身長 166.1cm、体重 60.6kg、体温 35.5℃。脈拍 60/分、整。腹部は平坦、軟で、圧痛を認めない。

血液所見：赤血球 363 万、Hb 11.4g/dL、Ht 34.6%、白血球 4960、血小板 10.8 万。血液生化学所見：BUN 9mg/dL、クレアチニン 0.58mg/dL、総ビリルビン 0.6mg/dL、AST 67 IU/L、ALT 50 IU/L、 γ -GT 124 U/L (基準 8~50)、IgA 604 mg/dL (基準 93~393)、IgG 1383 mg/dL (基準 861~1747)、IgM 100 mg/dL (基準 33~183)。

この患者に対して写真 A に示す治療を行った。その際の X 線像を B に示す。

A



B



(1)この患者の背景因子として考えられるものを次のうちから 2 つ選べ。

- a. 喫煙
- b. 糖尿病
- c. 高血圧
- d. 非ステロイド性抗炎症薬の常用
- e. 飲酒

(2)この患者に認められる所見として最も考えられるものを次のうちから 1 つ選べ。

- a. 嘔声
- b. 脾腫
- c. 体重減少
- d. 板状硬
- e. 血尿

解答

1

(1) c

(2) a

2

(1) b.e

(2) b